

に、光輝ある新しい時代に向かって進展させたいものと念ずる次第です。
 終わりに臨み、町長はじめ町行政当局、町議会、町教育委員会の立場で直接・間接に御指導・御助言くださいました方々、編集委員となり、執筆者となつて誠実に実務を遂行してくださった方々、その他、資料の収集や提供に御協力くださった各種の機関や団体あるいは個人の方々、また町内外から有聲無聲の応援御協力くださった方々に、心より厚く御礼申し上げます。

平成十三年(二〇〇一)五月

目次

口 絵	吉海町長	村上哲司	
発刊のことば	吉海町議会議長	村上武司	
発刊を祝して	吉海町誌編集委員長	丹下辰郎	
吉海町誌発刊にあたって			
第一編 地 誌			
第一章 位置と地形			3
第二章 地 質			4
第一節 黒雲母花崗岩(広島型)			4
第二節 粗粒花崗閃緑岩(松山型)			4
第三節 細粒中粒花崗閃緑岩(大島型)			4
第四節 石英閃緑岩(河野・来島・塔ノ峯型)			6
第三章 気 象			7
第一節 瀬戸内海型気候			7
一 気 温			8
二 降 水 量			8
第二節 気象と災害要因			9
一 花崗岩地帯の崖崩れ			9
二 気象災害			9
第四章 人 口			10
第一節 世帯数及び総人口			10
第二節 年齢三区分別人口			10
第三節 高齢社会の到来			11
第五章 植物と動物			13
第一節 現存植生			13
一 ウバメガシ(ブナ科)			13
二 クロガネモチ(モチノキ科)			14
三 ドベラ(ドベラ科)			14
第二節 動物 カプトガニ			14
第六章 西瀬戸自動車道と瀬戸内しまなみ海道			17
第一節 本州四国連絡橋建設の意義と必要性			17
第二節 西瀬戸自動車道の概要			17
第三節 建設の経緯(あゆみ)			18
第四節 来島海峡大橋			19
一 関連区間事業概要			19
二 世界初の三連つり橋			20
第五節 架橋の効果			21
一 開通直後			21
二 世界ばら展			22
三 前評判通りの「観光橋」として			23

第二編 歴史編

第一章 原始時代

第一節 旧石器時代

- 一 瀬戸内海と島々の誕生 27
- 二 ナウマンゾウのいたところ 28
- 三 島々の狩人たち 29
- 四 旧石器時代の主要遺跡と遺物 31

第二節 縄文時代

- 一 縄文遺跡の展開 32
- 二 縄文土器の世界 34
- 三 豊かな山海の幸と縄文人の生活 37
- 四 縄文人の精神文化 40
- 五 町内の縄文遺跡 42

第三節 弥生時代

- 一 稲作の渡来と弥生土器 45
- 二 弥生文化東伝の中継地 48
- 三 巨石信仰と高地性遺跡の謎 50
- 四 町内のおもな遺跡と遺物 53

第四節 古墳時代

- 一 王たちの出現 54
- 二 新たな有力者の台頭 56

第二章 古代

第一節 古代国家から律令国家へ

- 一 伊予の国造 71
- 二 伊予国の古代豪族越智氏 71
- 三 白村江の戦い 73
- 四 古代山城 74

第二節 律令国家の成立と発展

- 一 国郡制度 74
- 二 軍制 76
- 三 条里制 76

第三節 大島荘の成立と発展

- 一 荘園の発生 77
- 二 大島荘の概要 78
- 三 それからの大島荘 79
- 四 荘園の残影 80

第四節 海賊の跳梁

- 一 古代の瀬戸内海 81
- 二 海賊の跳梁 82

- 三 海人たちの活躍 58
- 四 芸子の航路と浦々 60
- 五 塩・鉄の生産と流通 62
- 六 町内の遺跡(古墳)や遺物 67

- 三 天慶の乱 83

第五節 武士の台頭

- 一 越智氏の武士団化 84
- 二 新居・別宮氏の発展 85
- 三 河野氏の発展 85
- 四 源氏と河野氏 86

第六節 産業と文化

- 一 製塩業 86
- 二 天平期の古代寺院 88
- 三 津島神社 89
- 四 在地勢力の氏宮・氏寺 90

第七節 源平の相克と瀬戸内海

- 一 平氏と瀬戸内海 91
- 二 源頼朝の挙兵と河野氏 92

第四章 近世

第一節 土農工商

- 一 松平氏による今治藩墾封 159
- 二 藩政の機構 160
- 三 大名と領民 161

第二節 村の開発と農漁民のくらし

- 一 新田・塩田の開発 173
- 二 生産と貢納 189
- 三 事件・騒動 195
- 四 日常生活の規制 201

第三節 信仰とくらし

- 一 水軍の戦法と水学書 125

第三章 中世

第一節 在地勢力の台頭

- 一 鎌倉時代 94
- 二 南北朝の動乱と畿内衆の台頭 104

第二節 村上三家の興隆

- 一 芸予諸島の旗頭へ 117
- 二 村上氏の水軍組織 122
- 三 水軍の戦法と水学書 125

- 二 源頼朝の挙兵と河野氏 92
- 一 平氏と瀬戸内海 91
- 二 源平の相克と瀬戸内海 91
- 三 津島神社 89
- 四 在地勢力の氏宮・氏寺 90
- 一 製塩業 86
- 二 天平期の古代寺院 88
- 三 津島神社 89
- 四 在地勢力の氏宮・氏寺 90
- 一 平氏と瀬戸内海 91
- 二 源頼朝の挙兵と河野氏 92

一 神祇信仰 209

二 仏教の浸透 216

三 大島四国八十八ヶ所の開設 221

第四節 学問と教育 226

一 寺子屋の普及 226

二 今治藩の心学導入 227

三 新民舎の由来 228

第五章 近代

第一節 行政 236

一 行政区画の推移 236

二 行政機関の推移 238

第二節 産業 243

一 農業 243

二 水産業 249

三 商工業 253

第三節 教育 264

一 明治初期における大島の教育 264

二 大正期の教育 266

三 昭和期の教育 266

第四節 衛生 267

一 保健衛生の沿革 267

二 地域医療(医療機関) 270

三 民間衛生活動 270

第五節 災害 270

一 地震の記録 270

二 塩害(宗門掘り紛争) 271

三 明治一七年の暴風雨・高潮の記録 273

四 泊・田浦の大水害 275

五 四阪島の煙害 277

六 海難 278

第六節 交通・通信 280

一 陸上交通 280

二 海上交通 281

三 通信 282

第七節 各種機関・団体 284

一 農業団体 284

二 専売局 285

三 商工会 286

四 警察 286

五 消防組 287

六 青年団 288

七 婦人会・処女会・女子青年団 290

第八節 兵事 291

一 兵事会 291

二 戦争と郷土 292

第三編 現代編

第一章 行政と財政

第一節 戦後の混乱期 301

一 民主改革の推進 301

二 経済の困窮と耐乏生活 301

三 農地改革 303

四 漁業改革 305

第二節 復興期 308

一 内外の動き 308

二 町村合併 309

第三節 建設・発展期 310

一 吉海町の成立 310

二 町政の実施とその時代背景 311

三 町議会 328

四 吉海町庁舎の変遷 348

五 選挙 355

六 財政と町政 366

第四節 吉海町総合振興計画 386

第五節 吉海町名誉町民 388

第二章 産業 396

第一節 農業 396

一 はじめに 396

二 水稲類 397

三 麦類 397

四 いも類 398

五 柑橘 398

六 その他の果樹 399

七 畜産 399

八 野菜等 400

九 農業協同組合 401

第二節 水産業 413

一 漁業 413

二 養殖業 414

三 漁業協同組合 414

四 製塩業 416

第三節 商業 417

一 吉海町の商業 417

二 吉海町商工会 418

第四節 製造業 421

一 醸造業 421

二 造船業 423

三 土木建設・生コン業 423

四 その他の製造業 424

第五節 金融業 424

第一章 宗 教	709
第一節 神社信仰	709
第二節 仏教信仰	711
一 吉海町内の寺院	711
第四編 文化編	
第二章 交通・通信	655
第一節 交通	655
一 陸上交通の発達	655
二 海上交通の発達	681
第二節 通信	690
一 郵便局	690
二 電信・電話	692
第三章 警察・消防	694
第一節 警察の沿革と現状	694
一 伯方警察署の沿革	694
二 吉海町駐在所について	695
第二節 消防と防災	700
一 消防団の沿革	700
二 常備消防本部の発足	704
第四章 環境衛生	652
一 地域医療	654

第五章 戦後における教育の発展	440
第一節 教育制度の改革	440
一 教育委員会制度	440
二 学校教育制度の改革	444
第二節 戦後から現在までの小・中・高等学校	456
第六章 戦後における教育の発展	438
第一節 エネルギー業	436
一 電力	436
二 ガス	438
三 石油類	438
第二節 戦後における教育の発展	440
一 教育制度の改革	440
二 学校教育制度の改革	444
三 戦後から現在までの小・中・高等学校	456
第七章 海運業	433
一 昭和二〇年代までの海運	433
二 昭和三〇年代以後の海運	434
第八章 石材業	434
一 大島石の採掘	434
二 石材加工	435
第九章 エネルギー業	436
一 電力	436
二 ガス	438
三 石油類	438
第十章 戦後における教育の発展	440
第一節 教育制度の改革	440
一 教育委員会制度	440
二 学校教育制度の改革	444
第二節 戦後から現在までの小・中・高等学校	456
第十一章 伊予銀行吉海支店	424
第十二章 愛媛銀行吉海支店	425
第十三章 農業協同組合	425
第十四章 郵便局	425
第十五章 観光・交通・通信	425
一 観光	426
二 交通	430
三 通信	431
第十六章 海運業	433
一 昭和二〇年代までの海運	433
二 昭和三〇年代以後の海運	434
第十七章 石材業	434
一 大島石の採掘	434
二 石材加工	435
第十八章 エネルギー業	436
一 電力	436
二 ガス	438
三 石油類	438
第十九章 戦後における教育の発展	440
第一節 教育制度の改革	440
一 教育委員会制度	440
二 学校教育制度の改革	444
第二節 戦後から現在までの小・中・高等学校	456

第二節 民俗・文化	717
第一節 生活	717
一 生活・年中行事・祭り	717
二 文化財	725
一 文化財保護	725
二 指定文化財	726
三 その他の文化財	730
第二節 民謡	753
一 唄	753
二 労働歌	754
三 祭礼歌・祝い歌	758
四 踊り歌・小唄・童歌	761
第三節 伝説・民話	765
第四節 地名の由来	776
第五節 方言	779
第六節 寺社参り	792
第七節 農村のくらし	794
第五章 郷土人物伝	799
一 小学校	456
二 町内小学校統廃合の経過	495
三 小学校歴代校長	498
四 吉海中学校	502
五 大島高等学校の設立と現況	513
六 吉海町児童・生徒数の変遷	531
第三節 社会教育の発展	537
一 社会教育の沿革	537
二 公民館	538
三 同和教育	569
四 各種団体	573
第四章 福祉と保健衛生	606
第一節 社会福祉	606
一 福祉・公的扶助制度の創設と沿革	606
二 新憲法と社会福祉の充実	607
三 児童福祉	626
第二節 保健衛生	630
一 近年における保健衛生の沿革	630
二 国民健康保険	631
三 国民年金	642
四 健康づくり対策	645
五 母子保健	647
六 老人保健	648

一 小学校	456
二 町内小学校統廃合の経過	495
三 小学校歴代校長	498
四 吉海中学校	502
五 大島高等学校の設立と現況	513
六 吉海町児童・生徒数の変遷	531
第三節 社会教育の発展	537
一 社会教育の沿革	537
二 公民館	538
三 同和教育	569
四 各種団体	573
第四章 福祉と保健衛生	606
第一節 社会福祉	606
一 福祉・公的扶助制度の創設と沿革	606
二 新憲法と社会福祉の充実	607
三 児童福祉	626
第二節 保健衛生	630
一 近年における保健衛生の沿革	630
二 国民健康保険	631
三 国民年金	642
四 健康づくり対策	645
五 母子保健	647
六 老人保健	648

第一編 地誌

一	村上 茂吉	799
二	水谷 縫治	800
三	矢野 裕	803
四	野間 信熙	804
五	村上万壽男	806
六	村上久米太郎	807
七	重松 恵祐	809
八	野間 仁根	811
九	明比 達朗	813
一〇	矢野 辨介	815
一一	村上 正	817
第二章 戦没者名簿		
第一節 戦没者の実態		
一	戦没者遺族援護	820
二	英霊の慰霊顕彰	821
三	吉海町戦没者遺族	821
四	戦没者忠霊塔	822
第二節 戦没者名簿		
一	軍別柱数調	861
二	太平洋戦争年表	863

第六編 新時代編

第一章	新時代を迎えて	869
第二章 具体的考察		
一	しまなみ海道の諸面相	869
二	行政と財政	870
三	産 業	873
四	教 育	875
五	福祉と保健衛生	875
六	交通と通信	880
七	観 光	891
八	しまなみ海道開通に伴う警察と消防	893
九	文化と宗教	894
一〇	環境対策	897
年 表		901

編集後記

追 記

吉海町誌編集関係者
協力機関・団体及び協力者名